

村上春樹「沈黙」論——内なる〈他者〉への想像力——

深 津 謙一郎

はじめに

本稿は、村上春樹の短編小説「沈黙」を語りに即してできるだけ丁寧に読み解こうとするものである。そうすることで、いずれ最終的に究明したいのは、「データメント」から「コミニットメント」へという標語によつて象徴される、転換点としての一九九〇年代・村上春樹文学の可能性である。

では、九〇年代・村上春樹文学を論じるに際してなぜ「沈黙」を取り上げるのか。この小説は、一九九一年一

月、「村上春樹全作品 1979-1983 ⑤ 短篇集Ⅱ」(講談社)に書き下ろしとして発表され、その後、短篇集『レキシントンの幽靈』(文藝春秋、一九九六年一月)、さらに『はじめての文学 村上春樹』(文藝春秋、二〇〇六年一二月)に再録された。比喩的に言えば、「沈黙」は、九〇年代をつうじて息長く村上春樹文学の最前線に立ち続いている。それが今回、この小説をとりあげる理由のひとつである。また、村上春樹文学を通史的に論じ、多くの卓見を示してきた加藤典洋が、この小説を九〇年代・村上春樹文学の「最低部」に位置づけたことも、今回の目論見と無関係ではない。

とはいっても、本稿で行うのはまず、その準備作業としての「沈黙」のテキスト分析である。論述に先立つて、簡単に小説の概要を説明しておく。この小説には、「僕」の一人称語りのなかに、大沢という人物の語りが入れ子状に収まっている。「僕」と大沢は、それまで何度か一緒に仕事をしたことがあるといった程度の間柄で、よもやま話のはずみに大沢が「僕」に語った話を、「僕」が再話するという設定である。大沢の話の内容は、中学時代、青木という同級生を殴ったことを発端として、高校三年の夏、青木によって仕組まれた身に覚えのない噂によつて学校のなかで孤立した大沢が、自尊心だけを頼りに卒業までこの集団の理不尽ないじめに耐えぬいたといふもので、しかし大沢は今でも、その種の孤立がある日突然再帰する恐怖に激しく脅えていると言う。

自作解説のなかで村上春樹は、「沈黙」は「故のないいじめにあって、孤立して一人でじっとそれに耐える男の子の姿」を描いた「きわめてストレートでシンプルな話」であると述べている。作者自身によるこうした言を素直に受け取るなら、この小説で語られようとしているのは、理不尽に個を潰そうとする集団への不信と、困難な状況下でも個であることを貫く強さへの称賛だろう。

を用いた。

一 語り手「僕」が語ってしまうこと

先述したとおり、「沈黙」には、「僕」の一人称語りのなかに、大沢という人物の語りが入れ子状に収まっている。そして、村上春樹が「沈黙」は「ストレートな話」であると言うとき、実質的にそれは大沢の話を指しているものと思われる。そう考えると、大沢の話の聞き手として物語世界内に身体を持つ一人称の語り手「僕」の役割は、「中学校の始めのころからずっとボクシングのジムに通っている」という大沢に対し、「これまでに喧嘩をして誰かを殴ったことはありますか」という「余計な質問」をして、大沢から予想外の重い話を引きだすきっかけを作ってしまった、という以外にはとくにないようにも見える。

じつさい、小説の語りのありようを確認してみても、「沈黙」の前半部（分量にして全体の五分の一ほど）では、大沢の人物像や状況説明の必要上、大沢の話は「僕」の語りにより要約され、編集も施されるが、大沢の話が本題（青木を殴った事件の顛末）に入つて以降は

このようなかたちで図式化される集団と個の関係は、「壁と卵」の比喩で話題になった一〇〇九年のエルサレム賞受賞スピーチを想起させるものであり、村上春樹文学を貫する大きな主題の存在を暗示するようにも思える。しかし一般論として言えば（村上春樹のテキストについて言えば、とくに）、何かが強調される際、べつの何か（意識的、あるいは無意識的に）隠されるということがしばしば起こる。「沈黙」の場合、「ストレートな話」であるということが作者によつてことさらに強調されるのだが、本稿ではむしろ、「沈黙」をそのように受け取つたときに隠されてしまうものに焦点を当てる。作者レベルで語ろうとしたところのものを否定はしないが、書かれたテキストはつねにそれを裏切り、作者の思惑を超えたものまで語ってしまうからである。今回、丁寧にテキストを読み解くことの意味は、そうした、結果的にテキストが語つてしまつたところのものを注意深く拾い出すということなのである。

なお、「沈黙」は他の多くの村上春樹短編作品同様、単行本収録の際に改稿されている。しかし今回は、本文の異同が本稿の趣旨に関わるものではないと判断し、テキストは「村上春樹全作品1979-1989 ⑤ 短篇集II」

それが終わるまで、原則として大沢を語り手とする彼の話が引用符を用いた直接話法で示される。この間、「僕」は大沢の話の聞き手役に徹し、大沢の話が終わつたしばしの沈黙のあと、「まだ時間は早いけれど、ビールでも飲みませんか」という大沢の誘いに応じて、「たしかにビールが飲みたいような気分だった」という感想を記すだけなのである。こうしたことふまえるなら、「沈黙」における語り手「僕」の存在はたしかに、ほとんど無視してよいようと思われる。

しかし以上の感想は、作者レベルで「ストレート」に語ろうとしたところのものを問題にする限りにおいてそう言えるのであって、結果的にテキストが語つてしまつたところのものを問題にする場合、話はべつである。第一節では、語り手「僕」という存在が、大沢の話の聞き手として物語世界内に位置づけられたことで、結果的にどのようなことが語られてしまつてゐるか、という問題について考える。

たとえば、大沢の話が本題に入つて以降、大沢の語りが引用符を用いた直接話法で示されているということは、そこにおいて、物語内容の速度と物語表現の速度が

一致することを意味している。この間、十数年前の中学高校時代の出来事を大沢は細部に至るまでほぼ言いよどみなく話し続け、「僕」はそこにひと言も「口」を挿んでいない。このことはすなわち、大沢の話は、「僕」との対話的な関係をつうじて即興的に生成されたものではない。「僕」に話す以前からすでに、過去がひとつのが因果関係のもとに整序された物語としてある程度整えられたことを窺わせるのである。では、その物語とはどういうものだろうか。

大沢が語る物語を解説するうえで手掛かりになるキーワードが「孤独」である。大沢によれば、「孤独」には二つの意味があるという。一つ目は、「神経を切り裂く辛く悲しい孤独」であり、これはネガティブな意味で用いられている。高校三年生の時、青木が仕組んだ（と大沢が考える）身に覚えのない噂によって大沢が学校の中であつたく孤立した時に味わった「地獄のような状況」がそれにあたる（以下、この意味の「孤独」を「孤独」と表記する）。そもそも一つの「孤独」は、大沢が中学時代から打ち込むボクシングをつうじて学んだとされるポジティブなもので、「深み」という比喩でも語られる。大沢によれば、それは「誰も見えないし、誰か

らも見えないくらい」「深い穴の底」で「暗闇を相手に戦うこと、つまり自己をその未知なる部分（暗闇）まで限りなく深く掘り下げる」ことを意味しており、そこにおいてはもはや他人に勝つ、あるいは負けるといったことは「本当にどうでもいい」。そして、「そういうものを得るためにには自分の肉を削らなくてはならないのだといふ（以下、この意味の「孤独」を「孤独」と表記する）」。以上、こうした「孤独」の二つの意味をふまえて大沢の物語を解釈すると、十数年前の一連の出来事をつうじて大沢は「孤独」を脱し、「孤独」を手に入れたということになる。その決定的転換の場面は次のように語られていた。すなわち、大沢が集団のいじめによる「孤独」に苦しめられ、不眠とノイローゼでほとんど「押しつぶされてしまいそう」になっていたある日、大沢は「身動きができないくらい」の通学電車のなかで、青木と偶然、「ちょうど向いあうような恰好で」互いの「顔を突き合わせる」。そのとき青木は、大沢に対し、「どうだ、といわんばかり」に「冷笑するような」眼差しを送つてくるが、そういう青木と睨み合っているうちに、大沢は急に、自分が青木に対して「怒りとか憎しみよりは、むしろ悲しみや憐みに近い感情」を抱いていることに気づく。

き驚く。そして、「この程度のことで」「満足し、喜んでいる」「深み」というものの存在を理解する能力」が欠落した青木のような男は、「どれだけ他人の目を引こうと、表面で勝ち誇ろうと」、結局、「空しい平板な人生」を送るほかないのだとと思うと、もう「彼のことなんて」「本当に、自分でもびっくりするくらいどうでもよくなつた」というのである。

このように、「深み」を欠いた青木を否定する文脈で語られる大沢の達した境地が、「深み」によつて擬えられる「孤独」であることは疑いない。青木のことは「本当に、自分でもびっくりするくらいどうでもよくなつた」という言明も、「孤独」においては、他人に勝つ、あるいは負けるといったことは「本当にどうでもいい」という説明と対応するだろう。そして、「孤独」を獲得して以降の大沢は、「自分は間違つていらないんだ、みんなが間違つているんだ」という「誇り」を頼りに、卒業までの五ヵ月間、「毎日胸を張つて学校に行き」「誰ともひとことも「口をき」かず、最後まで「沈黙」に耐えきるのである。こうして語られる「孤独」から「孤独」への移行を成長物語の一典型と捉えてよいなら、十数年前の出来事を語る大沢の話は、そのような成長物語として組

織されている。言い換えれば、大沢は自らの過去を、成長物語という解釈の枠組みをつうじて認識しようとしている。

ところで、大沢の語るこうした成長物語が、村上春樹が「ストレートでシンプル」に語ろうとしたところのもの、すなわち、理不尽に個を潰そうとする集団への不信と、困難な状況下でも個であることを貫く強さへの称賛といつた主題に重なる点を、ここでもういちど確認しておきたい。それと同時に、青木との対峙を経てもはや青木のような人間は「自分でもびっくりするくらいどうでもよくな」り、「孤独」を手に入れたはずの大沢が、今もなお、「孤独」の再帰に激しく脅えていると「僕」に告白している点にも注目したい。

大沢を今もとらえるそうした恐怖は、たとえば、「ある日突然」「何かひどく悪意のあるものがやつてきて」、現在の「平穏無事」な生活が「根こそぎひっくりかえ」されるイメージとして語られる。大沢によれば、「夜中にそういう夢を見て飛び起きることも」「しおちゅうあり、そういうときは、妻を起こし、「彼女にしがみついて」「一時間くらい泣いていることもあ」るという

こうしたエピソードは、一面では、大沢のような個としての強さを持った人間にさえ、今なお激しい恐れを抱かせるほど深い傷を与えた集団への不信をより誇張するもの、といった見方もできるかもしれない。しかしここでは、そうした恐怖に連なる何かに触れ（られ）たことに起因する大沢の動搖を語り手「僕」が見逃さず、記述してしまっている点に留意したい。大沢の話が語られるそもそもその発端となつた出来事、すなわち、「これまで喧嘩をして誰かを殴つたこと」はあるかという「僕」の質問を受けてから、大沢が成長物語を語り始めるまでのあいだの様子は、「僕」によって次のように記されていた。

大沢さんは何かまぶしいものでも見るよう目に細めて僕の顔を見た。

「どうしてまたそんなことをお聞きになるんですか？」

その目つきはどう考えても普段の彼らしくないものだった。そこには何かぎらつとした光を放つ生々しいものがあつた。

「僕」によれば、「でもそれもほんの一瞬のことで」、

する配慮とも、むろん受け取れなくはない。しかしそうであるなら、「僕」が一度変えた話題を途中で遮り、わざわざ前の話題を蒸し返してまでえてその話を持ち出す必要はないのではなかろうか。また、大沢が何かを逡巡している状態の様子から、彼が「僕」という他者を意識していたかどうかもじつは疑わしい。「何かぎらつとした光を放つ生々しいもの」を見せたあとの大沢は、自分自身のことに精いっぱい、眼前にいる「僕」への配慮が欠けていた印象を否めないからである（前述したとおり、しばらく大沢から放置されるかたちになつた「僕」は、その間、「仕方なくほんやりと窓の外に並んだ銀色のジェット旅客機を眺めていた」のである）。以上のような文脈をふまえるなら、そのとき、大沢の意識のなかに「僕」という他者はほとんど抜け落ちているのであり、彼はただ、自分のなかにある何か、もう少し言えば、自己に内在しながら、自己の統御を逃れる（他者）に突き動かされるようにして、それを語らざるをえなくなつたというのが実情ではないだろうか。

ところで、今なお昇華できない過去があつたとして、それをなかつたことにしてやり過ごす、というのも今を生きるためのひとつの知恵である。しかし大沢は、「で

大沢は「その光をすぐに奥にひっこめ、いつもの穏やかな顔つきに戻」つたという。しかし「僕」が「それからすぐに話題を変え」ても、大沢は「その話にはあまり乗つて」こず、あげくの果てには「何かについてじつと考えこんでいるよう」な様子で黙り込んでしまう。「僕」から見ると、その様子は「何かに耐えているようでもあつたし、何かを迷つているようでもあつた」ともある。しばらく放置されるかたちになつた「僕」は、その間、「仕方なくほんやりと窓の外に並んだ銀色のジェット旅客機を眺めていた」が、すると今度は大沢が「突然」（喧嘩で誰かを殴つたことは）「基本的には一度もありません」と言つて、先ほど終わつたはずの話題を再び蒸し返す。そして、「本当はこの話をしたくない」「できることならこんな話はさっぱりと忘れててしまいたい」、「でももちろん忘れられ」ない、「忘れないものは絶対に忘れられない」のだと笑つたあと、「おもむろに」彼の成長物語を話し始めるのである。

このように、語り手「僕」が記述した、物語を語り出す直前の大沢のやや不自然な逡巡は、「何度も一緒に仕事をした」だけで、ある程度距離を置いた敬語で会話する間柄の「僕」という他者に（重い話をすることに）対

きることならこんな話はさっぱりと忘れててしまいたい」、「でももちろん忘れられ」ない、つまりそれを想起せざるを得ないのだと「僕」に言う。いつたんそれに触れ（られ）てしまつた以上、たとえ相手が（数度の仕事上の付き合いしかない）「僕」であつても、大沢はそれを語らずにはいられない、ということなのである。こうした大沢の言動には、反復強迫を思わせるものがある。なぜこうなるのだろうか。

こうしたことの原因として考えられるのは、大沢がそれを想起する枠組み、すなわち物語それ自身の問題である。成長物語という、大沢が過去を想起し、認識する解釈枠組みによつて大沢は救われず、むしろそこに回収されない残余（のようなもの）をうそろす感知している。この残余こそ、先述したような、「平穀無事」な生活を「根こそぎひっくりかえ」す「何かひどく悪意のあるもの」のイメージとなつて大沢を激しく脅かす当のものなのだが、皮肉なことにそれへの恐怖が、大沢の物語への反復強迫的な欲望を起動させてしまう。「できることならこんな話はさっぱりと忘れててしまいたい」が、「でももちろん忘れられ」ない。つまりそれを想起せざるを得ないというジレンマに大沢を追い込むのである。物語世

界内に聞き手として位置を与えられた語り手「僕」の存在は、結果的にこうした大沢の迷い込んだ袋小路を語ってしまう。それでは、大沢を今も激しく脅かす当のもの、言い換えれば、成長物語に回収されない残余とは結局何なのだろうか。

第二節 大沢の内なる〈他者〉と暴力への予兆

第二節では、大沢を今も激しく脅かす当のものが、大沢の内なる〈他者〉（＝自己）内在しながら、自己の統御を逃れるもの）であると指摘する。また、その前段階の作業として、大沢が嫌惡する、というよりむしろ憎悪する青木という存在が、じつは大沢の分身（否認された半身）であることも併せて指摘する。

※

青木が大沢の分身（否認された半身）であると考える根拠として、大沢が青木に対して語るほとんど憎悪と言うべき嫌惡感を指摘したい。大沢に言わせれば、青木のことが「どうしてそんなに嫌いなのか、自分でもよく理解できな」い。けれども、「一目見たときから」「本能的

に」、そして「生理的に」青木が「嫌で嫌でしかたがなかつた」という。こうした大沢の説明が、すでに理屈の次元を超えたものである点に留意したい。また、大沢はべつの説明で、青木の「要領の良さと、本能的な計算高さのようなものが最初から我慢できなかつた」、あるいは、青木が「体から発散するエゴとプライドの臭いがもう本能的に我慢でき」なかつた等の補足もくわえるが、ある程度青木と付き合つたあとでならまだしも、なぜそういうことが彼を「一目見たときから」分かるのだろか。大沢自身、「それがわかつたんだとしか、言いようがない」と開き直るとおり、大沢の青木に対する憎悪は、理屈を超えたある過剰さをともなつて語られる。こうした過剰さは、あるいはこうした過剰さゆえに、この問題は青木の側に起因するというよりも、むしろ大沢自身に起因するものではないかと疑わせる。つまり、大沢が青木に対する過剰な嫌惡を語るとき、ほんらいは自己の否認された半身に向けられるべき憎悪を、青木という外在化された存在に投影して語つてている可能性が考えられるのである。

また、大沢はいたるところで青木との差異を強調し、「青木と僕とはあらゆる意味で対照的な立場にい」と

言う。しかし皮肉なことに、青木との差異を強調しようとするあまり、大沢は逆に青木との意外な近さ、というより重なりを語つてしまつていて。たとえば、「クラスのスターであり、オピニオン・リーダー」だった青木に対し、大沢自身は「クラスでもあまり目立たない人間」で、「もともと目立つことがそれほど好きじゃなかつた、「同級生とつきあうよりは、一人で本を読んだり、父親の持つていたクラシック音楽のレコードを聴いたり、ボクシング・ジムに通つて年上の人たちの話を聞いたりしている方が好き」だつたと振り返る。そのうえで、「何をやつても泥沼の中の白鳥みたいに目立」つ青木は、じつは「風向きひとつでただくるくると回つているだけで」、「自分っていうものがいい」男だと酷評し、周囲の人間がみな青木の「才覚」に惑わされ、「青木のことには感心」するなかで、「おそらく僕だけ」が彼の「浅薄」さを理解できていたのだと主張する。そして自らについては、青木とは違い、「僕自身の世界というものを持つてい」たとも言うのである。

岡田豊が指摘しているように、こうした大沢の態度こそ、周りの級友や教師たちが見て、（大沢自身、その臭いが原因で青木のことが我慢できないという）「エゴと

プライド」を「体から発散」していたであろうことは疑いない。じじつ大沢自身、「そういう無言の自負心のようないなもの」の存在を否定していないのである。このように、大沢が語る青木の像は、いつの間にか大沢自身と重なりあう。大沢が初対面の青木のなかに「エゴとプライド」を嗅ぎ取ることができたのは、それがじつは大沢自身、大沢の分身（否認された半身）から発せられたものだつたからなのである。

しかし大沢はあくまでも、それを自己の外部（＝青木）にあるものであると誤認して、青木に対するさらなる憎惡を募らせる。大沢のこうした感情は、こののちの二人の関係を決定的にこじらせ（中学生の時、青木を殴つた際も、「相手が青木でさえなければ」きちんと謝つていたと思）うが、「青木という男にだけはどうしても謝る気にはなれ」なかつたと大沢は回想する）、そのことがやがて、高校三年の大沢を、「地獄のような状況」に追い込んでいく。そこで大沢を苦しめた「孤独」は、彼の憎惡がじつは自分の分身に向けられていたことを最後まで認識できず、それを青木という外在化された存在に対する憎惡と取り違えたところに起因するのである。あくまでも「ストレート」に組織された大沢の成長物

語は、以上のような出来事の核心部から大沢自身を遠ざける。その結果彼は、彼の物語によつては救われず、そこに回収されない残余の存在に激しく脅えざるを得ない。前節でも指摘したように、今の彼をとらえるそうした恐怖は、次に引用するような夢のイメージに形象化されていた。

夢の中には沈黙しかないんです。そして夢の中に出でくる人々は顔というものを持たないんです。沈黙が冷たい水みたいになにもかもにどんどんしみこんでいくんです。そして沈黙の中でもなにもかもがどろどろに溶けていくんです。そしてそんな中で僕が溶けていきながらどれだけ叫んでも、誰も聞いてはくれないのです。

ここで大沢の夢に出てくる「顔というものを持たない」人々というのは、「青木のような人間の話を無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中」、さらには、「自分が誰かを無意味に、決定的に傷つけているかもしれないなんていうことに思い当たりも」せず、「何の責任も取りやしない」連中のことであると大沢は言う。そし

て、「青木のような人間」よりもこういう人々のほうが「本当に怖い」「怖くて怖くてたまらない」のだと付け加える。こうした「顔というものを持たない」人びとに対する大沢の恐怖心は、大沢の話のほとんど末尾で語られるが、ここにいたるまで一貫して青木に向けられた憎悪が強調されてきたぶん、やや唐突の感も否めない。しかしここまで議論を踏まえるなら、このことについてある程度の説明は付く。

すなわち、この問題の核心が青木ではなく大沢自身に内在している以上、高校を卒業して青木と別れても、それだけで事態が改善されるわけではもちろんない。本来は自己の分身に向けられた憎悪の正体を、大沢が正しく認識しないかぎり憎悪は解消しないからである。むしろ卒業後は、青木という外在化された分かりやすい敵を失うぶん、憎悪は自己に内向したまま蓄積するだろう。大沢が「怖くて怖くてたまらない」というものの核心にあるのは、自己に向し、蓄積されたこうした憎悪が、いつか歯止めのきかない暴力（先の言葉でいう〈他者〉）となって回帰して、自己を失つてしまうことへの予兆であると思われる。じつさい、このような恐怖を、大沢はすでに過去にも経験していた。その経験は次のように語

られる。

抑圧されたものが回帰するイメージである。いくら青木が「人間の屑」でも、現実には彼を「思い切り殴つてやる」ことはできない。こうしたフラストレーションが、想像のなかの暴力として発現したのがこの引用部分なのである。

そして、以上を確認したうえであらためて注目したいのは、そうして回帰した暴力が、やがて大沢の意思に関わりなく発動し、大沢自身もそれを統御できなくなるという点である。大沢によれば、「天井を眺めていると自然に青木の顔がそこに浮かんできて、気がつくと」「青木を殴りつけている」。そして「一度殴りはじめると、それを止めることができない」。その結果、彼は「だんだん嫌な気持」になり、「実際に気分が悪くなつて吐いたこともあります」。このとき、大沢をとらえた「嫌な気持」の正体は、自分が（良心も含む）自分の意志によつては統御できない〈他者〉に乗つ取られていく、言い換えれば、自己のなかに〈他者〉がいるという感覺であろう。大沢が「怖くて怖くてたまらない」というものの核心にあるのは、このようなかたちで自己が〈他者〉に乗つ取られ、自己を決定的に失うという感覺なのである。

ここで大沢が語っているのは、明らかに、日常のなかで

さらに言えば、大沢の想像のなかで、顔がぼろぼろになるまで〈他者〉の暴力にさらされているのは、もはや言うまでもなく当の大沢自身なのであるが、暴力の発動によつてぼろぼろになった顔のイメージと、大沢が激しく脅える「顔というものを持たない人」のイメージは、個別の顔（パーソナリティ）が識別できないという共通点で互いに繋がりあう。こうしたイメージの連鎖は、「怖くて怖くてたまらない」「顔というものを持たない」人びとも、青木と同様、じつは大沢自身であることを言外に語つてしまつてしているのである。

おわりに

以上本稿では、作者レベルで語ろうとしたところのものではなく、結果的にテキストが語つてしまつていて、そこには焦点を当て、「沈黙」を読み解いた。その結果、作者の言う「ストレートな話」として受け取るかぎりで、集団への不信と個であることを貫く強さへの称賛が主題の成長物語と読めるこの小説が、しかし実際には、成長物語に回収されない残余を語つてしまつていることを確認した。その残余から浮かび上るのは、自己の分

身に向けられた憎悪が認識されないまま内向し蓄積された結果、いつか歯止めのきかない暴力となつて回帰して自己を失つてしまうこと、そうした自己の内なる〈他者〉に対する激しい恐怖である。

こうした〈他者〉に対して開かれた想像力のなかに、困難な状況のなかで「コミットメント」を模索していた九〇年代・村上春樹文学の良質の部分があると考えるが、それが明確な言葉として語られる九五年の「オウム真理教事件」に対する洞察^(注1)より以前の九一年「沈黙」の段階で、すでにひとつ可能性として先取りされていることが、今回の「沈黙」のテキスト分析によつて明らかになつた。

(注)

注1 この二つの標語については、たとえば、河合隼雄・村上春樹『村上春樹、河合隼雄に会いにいく』岩波書店、一九九六年一月を参照

注2 『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』講談社、二〇一一年八月

注3 「解題」『村上春樹全作品 1990～2000(3) 短篇集Ⅱ』講談社、二〇〇三年三月

うした文脈のなかで評価される必要がある。

注4 たとえば、「沈黙」が再録された『はじめての文学 村上春樹』の自作解説「かえるくんのいる場所」のなかでも、村上春樹は「この短編小説は僕の作品系列の中では、かなり特殊な色合いのものだらうと自分では思つてゐる。とにかくストレートな話だ」と述べている。

注5 大沢と青木が分身関係にあることについては、すでに加藤典洋による指摘がある。加藤典洋が注目するのは、大沢が【孤独】を手に入れた通学電車の中での青木との睨みあいの場面であり、鏡をつうじて大沢が分身と対峙するイメージを読み取っている。加藤典洋注2前掲

注6 「村上春樹『沈黙』に関する一考察——大沢の『沈黙』／『僕』の『沈黙』」『駒沢國文』四三号、二〇〇六年二月。この意味で、大沢を貶める根拠のない噂が流れたり、級友たちが大沢から離反し、彼を孤立させる土壤は大沢自身が作つていたとも言えるのである。

注7 「目じるしのない悪夢」『アンダーグラウンド』講談社、一九九七年三月を参照。このなかで村上春樹は、「オウム真理教事件」に際して彼が感じた「後味の悪さ」を掘り下げて、オウム真理教の論理が、「我々」とつて無関係の「あちら側」のものではなく、むしろ「我々が直視することを避け、意識的に、あるいは無意識的に現実というフェイズから排除し続けて、自分自身の内なる影の部分（アンダーグラウンド）」であつたことに思い至る。そのうえで、このような暴力を回避するための「新しい方向からやつてきた言葉」と「新しい物語」を模索しようと試みるのである。以降の村上春樹文学はこ